

あゆみ通信

VOL. 144

あゆみの会(真宗大谷
派大阪教区第2組同朋
の会推進員連絡協議会)
会長 細川克彦
広報 本持喜康

「経」というのは経なり。経よく 緯をもちて匹丈を成ずる 観経疏



お経について、善導大師は「『経』というは経なり、

経よく緯をもちて匹丈成ずることを得て、その丈用あり」と表現されます。経は経系で、緯は緯系という意味です。匹丈は布を表しています。経系がしっかりはられて、緯系を通すことで布が織り上げられます。つまり、経系が緯系を受け止めていくわけです。

ですからお経は、あなたをずっと受け止めていく、人生を貫く経系として表現されているのです。緯系は、私たちの日々の体験や、それこそ点数が良かった悪かった言っている一つひとつの出来事です。経系がしっかりしていなければ、緯系という一つひとつの体験は思い出の積み重ねにはなっても、結局最後はバラバラになってしまいます。

それに対して一つひとつの出来事をいただいていくために、経系という形で受け止めてくださるものがある。そのことによって、一つの貫かれたものとして、人生に自分を本当に確かめていく方向が与えられます。それが、お経のお意だと教えられているのです。

そういう意味でお葬式は、私を大事に受け止めてくださった方の織り上げた人生の布を確認する場であると同時に、今度はその方の布を私が受け止めていただいていくことです。つまり、その方の人生から、改めて私自身の経系を確かめ、そこに習っていくこと

が、浄土真宗のお葬式ではないかと思えます。

(四衢亮「南御堂」紙2019年8月号から)

第36回第2組 同朋大会は 中止されました



3月6日(土)

午後2時から、
難波別院新御
堂会館で、高
名な釈徹宗先

生(浄土真宗本願寺派如来寺住職、相愛大学教授)をお迎えして開催を予定していました第36回第2組同朋大会は、この1月19日(火)開催の第2組教化委員会で、墨林浩組長(光照寺)、池田英二郎副組長(宗恩寺)はじめ多くの委員が参加して検討した結果、昨今のコロナウイルス感染拡大と緊急事態宣言。そして残念ながら感染者の効果的な減少が見込めない中で、たとえいろいろな感染防止施策をしましても、別院への電車や経路でのことを考えますと、絶対安心はできないうえに、昨今の医療逼迫の状況を考えると、ご参加者のいのちを守ることこそ大事と考え、苦渋の決断をしました。この結果は、26日(火)の第2組の組会で協議の上、正式に決定され、各寺院に伝達されます。

2年続きの中止に、無念ではありますが、門徒の私たちはひたすら念仏生活に邁進していきましょう。



親鸞のこゝろ 念仏することこそ浄土への道 念仏成仏これ真宗 (浄土和讃)

人間は「歳を取って元気がなくなった」「最近、頭がむい」とい・・・そうした悩みに動かされて「老けないように」「病気にならないように」と、サプリメントを飲んだり、体を動かしたりして頑張ります。いつかは死ななければならないことを、頭では分かっていますが、そのことを見つめるのを遠ざけ、いざ病気でとなると慌てふためきます。

ここ数年、終活ブームです。この終活は、自分が死んだ時に備え、どのような葬式をするのか、埋葬方法、遺産についてなど、エンディングノートを作成して準備することです。終活の背景には納得して死んでいきたい、家族には迷惑をかけたくないという思いがあります。

浄土真宗の教えに「終活」があるとしたらこれとは異なるでしょう。亡くなった後のこと、に力を入れるのではなく「念仏成仏」(念仏して仏になる)の教えを聞き、自分も死すべきいのちを生きていることをしっかり見つめ、「今、ここ」を生き活きと生きていくことだと、考えられます。(「人生を照らす親鸞の言葉」名古屋別院監修から)

我欲手伝う仏 在さず

コロナ禍で法話が配信され、生で池田勇諦師のお声を聞くことができた。有り難い。

南無阿弥陀仏の仏は、我々の我欲の後押しをする仏ではないとさんざん聞かされ、頷いているものの、いざ、今回のコロナのような逆風が来ると、たちまち自我の心は、南無阿弥陀仏の仏までも我欲手伝う仏にし立て替えて、期待と要求を突き付けていく。

真実の仏は、私がものを見る・聞く・考える・行動する感覚、智慧となって働いて、本当の私になってくださると。いよいよ聞き直していかねばならないと痛感した。聞法第一。(本)

第2組合同報恩講での 藤井善隆先生の法話要旨・続



もう一つ、**「師主知識の恩」**。師主というのは、お釈迦様のことです。知識は諸仏です。一番の知識は、私に念仏の理を教えてくださいました私の大事な先生方です。私にとっては、広瀬 果先生と松原祐善先生です。

先生方の話を聞くと、難しいことを言われていて、頭で理解したら何もわからないけれど、前に座って聞かせていただいていると、理屈なしに何か、響いてくるのです。離れなくなるのです。やはり、この先生の所へ聞きにいかないと。そういうものが本願力なのでしょう。

それが言葉になって、生きざまになって、私たちに具体的に見せてくださらないと。教えだけでは分からないでしょう。生きて実践して、そして、私たちに伝えてくださった。このお釈迦様の代わりに親鸞聖人、蓮如上人、そして七高僧も入るのです。いろんな諸仏が教えになって、言葉になって、あるいは生きざまになって、私たちに「念仏申せ」「阿弥陀仏にたすけられなさい」と勧めてくださる。

とにかく、この二つが私たちの心の闇を照らしだして、阿弥陀様の光を受けて、初めて、私はいったい何によって、今ここにこうして生かしていただいているのか、私を私にしておってくださるのか、そこに初めて心が目を覚ますのです。

自分というものに問題が起こるということ、それをたずねていくあゆみが始まるということです。そうさせてくださった御恩です。御恩というのはそれなのです。苦しみ悩みが御恩です。何故かという、苦しみ悩みがあつてこそ仏様の教えを聞くようになるのだから。

この苦しみ悩みはいったいどこから起こってくるのか。根元は何なのかということ、そこに因を心に寄せて尋ねていく。

だから聞法会は『恩』という字におさまるのです。

私が私であるその一番の元に何をもって私としているか。私がという自我の心に立って私が生きているのか。闇は教えにあわないと晴れません。都合の良いときだけは喜べるけれど。健康で有り難い。生活に困ることもないから結構、有り難いと言っているけれど、それが無くなればいっぺんに真っ黒けになります。どこに立ってあなたはそう言っているのかと。本当に大丈夫かと。今日も皆さんこうしてお集まりくださった。もうすでに如来大悲の恩徳をいただいているのです。それに気が付いて欲しいということです。私が来たと思われるがそうではない。家を出てこゝへ来て、仏法を聞いて喜ぶのが仏教ではないとおっしゃる。安田理深という先生が。

家を出たのが仏法だと。家を出させる働きです。

「今日、第2組の報恩講があるよ」ご住職さんが呼びかけられた。これが釈迦諸仏。これが「発遣」です。

内から如来は常に私をこゝへ来るように招き呼んでくださっている。命の呼びかけ。

「招喚」です。諸仏は外からで、ご住職さんであったり、家族であったり、周りの友達であったり、行きなさいと後押しして「発遣」して下さる。何を発遣して下さるのか。「ただ、念仏しなさい。阿弥陀さんに助けられるあなたになりなさい。そして、阿弥陀様の本願をいただいて、その心に従って、この人生を生きる一人ひとりになってくださいと。これが発遣と招喚の声ではないですかね。その御恩が分ったら、自ずから手が合わさるし、南無阿弥陀仏と、いつも自分に立ち返ってそこから新しくこのいろいろな苦しみ悩みを引き受けて、「よし、生きていこう」という大きな力になっていく。

それが「ほねを砕きても謝

す」「如来大悲の恩徳は身を粉にしても報ずべし、師主知識の恩徳もほねを砕きても謝すべし」この「身を粉にする、ほねを砕く」という意味は、どんな現実が来ても、苦しみ悩みが来ても、それを引き受けて、それを逃れずに、そこを自分自身として、自分の生きる場所として、苦しみ悩みを引き受けて生きていきます。どんな苦労も苦労としない。そういうことが如来の御恩に報いていくことではなかろうかと、私は自分の今までの人生を振り返って、すべてがこの「如来大悲と師主知識」のお育ての中で、今日のこの私をあらしめてくださってあった。歳と共にいよいよそれが、有り難いなあ、お陰様やなあ、もったいないなあと。そのことに私はろくに報いようともしないし、そんなに有難いと思わない自分なのですが。でも、いつも自分自身に立ち返らせてくださるそれがお念仏のお育ての有難いところと思っています。(要約は事務局)

第2組聞法会日程決まる

感染拡大のコロナ禍で始まった今年ですが、仏法聴聞の要の聞法会日程が決まりました。

なお、開会は午後2時。会場は未定ですが、決まり次第報告。

○4月21日(水)
講師：大橋恵真先生

○5月26日(水)
講師：新田修巳先生

○6月12日(土)
講師 宮部 渡先生

○7月24日(土)
講師：新田修巳先生

○8月28日(土)
講師：廣瀬 俊先生

○9月27日(月)
講師：新田修巳先生

なお、コロナ禍の感染状況などで、日程の変更や中止もありますので、よろしくお願いします。



大橋恵真師 宮部渡師 廣瀬俊師 新田修巳師